

912.3

力

春日就神
葵上

穢通
紅葉栲

華教安小町
山止安

關寺小町
善畧

通小町
藤



○春日龍神脇三人角帽子水衣杏

月のゆく姿腰帯扇珠紋を好むとく日此

の家ををる秘んやま 是ハ梅尾の助

恵法師をゆく我入唐渡天のあり

にふる道徳乞の為唯今まろりれ月此

1 中道徳は作たの上 是是山様やま

取ふえて歩く雲ふなすは此器の松縁

春日

上
志を己に求むるは神の心を後にあんく
是を南の邦らや、素良坂のて
心ま目の雲もまらふらとく

はるまひもまらふらとく

射風折水衣

大舌腰帯

たのりま 丈ふる物さふらとく

古今小通とて神をとりて
安のちまらふらとく
中
時色 月小なるも色居の
上
沙社の抄るひもいそか
の代ふる未をて
影まらふらとく

乃事とあるは救世の事なりと云ふは
三三三と云ふ事ありと人の心あり

有はは種はは後とありて我々の心
もとなふ事ありと唯と云ふ事ありと云ふ

もある事ありと云ふ事 唯と云ふ事あり

の後ありと云ふ事我入唐後天は云ふ事あり

四時七の事ありと云ふ事 云ふ事あり

在ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

此の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

別靈と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

昼夜者事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

或時々のまじくあはれ居唯其はわ
ねむ津のまふくさうりて津
をあらわたりませく支那法は
さそその時代おびらつては法布の所
及今我れ乃何言さや徳る小入唐
渡天と山もは法法布の名をとりは
流をあらまらんおをの早山をおら

むとくは法敷山おまふ人しあ基山の
今とあらは吉時流波をあらへし者
は聖徳太子今らをあらせんと
大の神と示現し山おま井志は
川徳書の山上をあらむ中日乃山をあらむ
曲下我はし中建親也年月佛が世
聖くはまをあらむのよをあらむ人乃

く... 人... 様色...

... 今宵... 説法...

乃... 又... 天... 空... 乃... 麻...

伽... 那... の... 成... 立... 説... 法... 以... 双... 林...

の... 入... 滅... 海... 之... 妙... 妙... 妙... 妙...

將... 實... 之... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...

其... 時... 風... 秀... 乃... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

下... 小... 雷... 動... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

一... 同... 小... 雷... 動... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

大... 地... 震... 動... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

武... 大... 龍... 王... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

阿... 羅... 漢... 王... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

又... 迦... 羅... 王... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

又... 迦... 羅... 王... 其... 妙... 妙... 妙... 妙...

引はきく平地小波瀬をちて佛の
 舎座不出来して四行を種はする其
 加妙法那羅王又持法那羅
 王樂乾園彼女王樂言乾星彼王
 美波雅阿修羅王羅雅阿修羅王乃
 垣沙の眷属引連く是は如く
 有列をり塔勢をすらまは波瀬の神

く白妙のまや田の系乃波は白玉
 舞の縁のをたもつる海系や仲の
 えかま月れ山系の佐保の川つふうるを
 紫の八太勢王乃勢王八の冠をかこふ
 け取春日神の月れ乃雲にのり地
 ありりて勢力の神をもてまや摩那の
 誕生勢の勢の法法ぬ林の入城をく終りて

その月影をささうとさひ照るからと雲
井は夜ふたさうささくわさ海をにさゆ
ひまらうをな海種れさく
あ

笑も俄お日くれぬあささうとささる

弱まうてあはをわさまへさひさ
小籠さうては枝の塵式う海のあ

あささひささ誰かうと塵をさひさ

あささひささ誰かうと塵をさひさ

さささほりさあさあさささわ
大谷豊平 流桐の夜うあ頻つら小あ
笠松の

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

あささほりさあさあさささわ
流桐の夜うあ頻つら小あ

と交し、**蟻**を、**津**は島居乃三根立
雲は**地**ふらん、**赤**かやまも**地**の煙の鳥
如くをるよふ折の子は水の柳陰乃
東りくつめく、**あ**くさくさく**あ**くさく
なまき、**あ**くさくさく**あ**くさくさく
よきらうの**あ**くさく**あ**くさく
あくさく**あ**くさく**あ**くさくさく
七、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく

紀事之^レ如^クは、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく
あくさく**あ**くさく**あ**くさく
とす、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく
とす、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく
未^レく、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく
言^レは、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく
とす、**あ**くさく**あ**くさく**あ**くさく

のふれおをえらひてよりうみをぬへし
ゑん代乃まくななるたを影す曲下まゝ
おのくまきい奇のんすあかなるも
乞ひつゝ松ありん代ふまゝんて甚
に尚風俗の長奇短奇旋以器本の
奇くひ乞なり難解ひ何ふあまき六
源流原う原く原る末の也乃中北等又

秋乃蝶の也乃あうりまきり和奇後
らぬまきいも乃あうり邪をなうま
かろうい邪も納受まをうり尚ま人
か尚奇物ふ盛坂の園乃清水水
影乃ゆり月毛乃け物をもり立乃ま
あまきあひもれもくおあまゆく越香
南枝小葉をうを胡る水風にのまへる

武家や商人愛ふして 情物より月事前
 日上 天地ひらき物り志より 舞衣はたあそぶを
 かれ今書き之の綱乃未れく 妙なる心を
 感する者ふかむふ法をよむるそとてさる
 居の筆本おまゝ事おまゝをれくとも名傳
 までかきます極ふ若ふり書きてはを
 ひの糸珠の神系秘めて旅立元まきゆく

三

率都染小町 脇僧人 角帽子水尻腰帯
肩珠杖指玉掛

山をわたりて隠る北山 浅衣にこれの
 海をわたりてらん わき月 老翁野值山此

少つてはの靈佛 靈社兼務の為唯と邪

今より 史系佛ハ既小きり後弘末世

中 ぬおす者此中ある生れて何をも

思ふへをたましく交りて人男をうけ産

かゝる世事の教法も多事をもう悟る
の程あるともふんもひるかな海堂の教
お身をおく^上て歩生をぬきた乃男を
あれ^二く^一 憐しむき親とけ親
のあまき^二ら^一るおふら^二を^一おら^二し^一海堂
の^二あ^一ま^二き^一を^二ゆ^一く^二を^一ま^二り^一の^二世^一は^二あ
ら^二ま^一と^二海^一の^二あ^一そ^二宮^一控^二海^一の^二男^一は^二智^一ひ^二衆^一

〱
〱
〱

あまき程おそくもや津のまあへ

松原とのや^二や^一の^二皆^一は^二あ^一ふ^二休^一ま^二た^一也^二其^一の^二あ^一ま^二り^一

面老女姥髪小袖ヌキカマ^二身^一ハ^二海^一堂^二と^一さ^二そ^一ふ

氷衣腰帯杖笠^二然^一下^二下^一

水身ハ^二海^一を^二懐^一ふ^二水^一なき^二よう^一の^二あ^一ら

これ^二あ^一ま^二り^一の^二あ^一ま^二り^一へ^二る^一橋^二傍^一ら^二を^一

す^二あ^一ら^二す^一い^二志^一か^二ん^一さ^二う^一ハ^二あ^一ら

と^二あ^一ま^二り^一の^二あ^一ま^二り^一て^二楊^一柳^二乃^一ま^二の^一風^二あ^一ら

秋山

くまのし又香の山はけり八海をま
ゆる東嶽のうまがりお暖物待あらし
杉跡や今八民間始れあおさう入さあま
徳んお如をさうし娘かきさ月日身お
積つて百年の縁もありてさうあ娘さ弟八
んおはまもやもそれらう夕言言月
あさお出さすせく〜雲井百友座

大内山乃山寄もか海夏身おもこあ一本
隠まそりやや香物乃急隊結の心月此
あさ川水あま交り人八雅集らんく
日おの指お毛はまや津ああ人お松東と名

甲の飯おさううの程お毛なる杉本あお腰
とあまてお体まらやとらひのなふく毛

あさ乞巧人の物んああう後ま〜とれとあ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

地水火風空 五神の備へ人の神あり
あはれてれ多入受そ 形をそ通にたふす
たふ切通八のり入一 さら平部波あれ
切通といふ 一也平部波永隆三西乃
一念教知業挽心あまもいふくかきそ入
支 業挽心あつても平部波世の厭ぬえ
勢の世をもいふるよりふくふく 心あま

方部通はより以神を六知とゆらめ 以神

と忘れらあそ平部波あめを侍さうすも
いふらなと礼をまてあさてあさるるを
とそ色帯しうあひそもを我れ体むらあ
しひら 史多唱あうたのあさうり
海なりやうあへ 提婆あう魚也
観者此意也 盤指うあ病也 又珠

若くはをなす事進んをあらたき

新法を申すはく一 何れにあら

何れにの中一のらるる事あり 上二二

如前乃那日申すのらるる事あり 上二二

のなす事果てきあり 上二二

か由町は古くは 上二二

吾校の代志あり 上二二

甲 上二二

舞臺の衣あり 上二二

あそび 上二二

日 上二二

心 上二二

た 上二二

と 上二二

此曉の波あり 上二二

由して我輩も亦其後をたぬと云ふ事あり
被と袖とありたり今も此の如し
らハ漢書に人お物ありと云ぬ時ハ
又程礼のハはましくありたり
あお物すへのお借りふ 何よりそ
僧はお前存へよりあよ ねとて
お前よ何とてうつあま事と云ふ事あり

張
お前町と云ふ人の姓と云ふ事あり

たのむ事ありと云ふ事あり
月取此座と云ふ事あり
て今百年にたると云ふ事あり
人ありと云ふ事あり

成者のつとそひ多事と云ふ事あり
お前お公をうけ

し人お物ひと云ふ事あり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red circle and red lines, highlighting specific parts of the text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several red markings, including a red circle and red lines, highlighting specific parts of the text. The script is dense and difficult to decipher without a key.

二二
一
△月の上小

何白落乃及あなさん
の道はわん凡々ゆん
はあかなうく人さゆり年月を送り遠入
て去林の病淫病耳て若あふ後し虫
の病はあきまするも生るるをてふ所りと
なつく唯様も一日の業小円一ちやあま
なくあきぬ敷そあ世申う。若くあまの目

△四切

あふ
一
一
ちり
一
一
一

まてあけめんを極々あもも種あわりの
まてあけあまひり葉落てに残る葉はハ
病の病なりまゆそあ一の若ああけ
の病の病もあひ一何さるも又あふも
あありゆく若れせめてと又けめのをえ
あしあまあふ古へ一若と向り一若と
も病あまあふり極あまあま掛戸あ

あゝ死靈のさうかひも 梓に無き世のりさ

中せぬ

まやとあひ 登久 梓ふいのけいへ

天清淨地清淨内外清淨を根清淨

らり人々今我ららるる清淨なるあまの

面泥眼唐織のうりへ

三乃

車に法乃た火室乃肉をわぬん

夕影の宿乃屋建車屋るかゝるきさう

あしひ

あしひ

かめがれし 海半の車乃うらぶ
牛の車北の海や難ひな海ん
よそ梅の車乃梅乃とくち紙のまを
おぼしき人君の不定まをを泡沫乃
世のなまひの世の世のあまのあまの
あぬうあひかなまを乃海乃人の眼
程もひくもれもやぬらひせめくも

あつて慰むと様乃弓小急空のもろ
影連ぞいななり歩 慰み初めやと見え
も悲ひ車乃我際歩月をいなるああを
と月をいなるああを月をいなるああを
えとくけりふの様乃弓たうらまづふ立
寄海をわくせん 様乃弓の責
いれそや様乃弓此書いりくそむ

このまじり 下六

まのりやうつまをふぬきまじり
あけまじりあかんらあ 神子 上カカリ
あぬ上臈の被も車にあきまて海にあま
女房とあかりき人の半らあき車れあ
おちつてはあくともあきまじり
とあうのうあくあかん 大后 ちあひ
推多りては唯つものまをまあああ

そが、刑行乃子細乃以て何人と

大住のりとしのる、兼さうすは

刑行の細

以て大住のりとしのる兼さうすは

何れもさうすは

是の持乃が邪氣とんて

お指しあうすは

いひ

わ

わ

な

大住

お指しあうすは

わ

行者、お指しあうすはの行

者のお指しあうすはの

のお指しあうすはの

出得乃お指しあうすはの

あうすは

東方不降三世の

あうすは

面ハシヤ長カニシテ
腰巻歩杖箱

いふ

者もや何の故に御して云々。此の如く
 たゞひの心を念ふなりともは法
 カつてをきくとも云々。殊教を御しんて
 東上方上小降三世の王上く南方軍陸利夜
 又上西方大威徳の王上く北方金剛上 夜
 中央大聖 不動の王なる御しんて
 魚を御したる人魚摩訶嚕志やを云々
マカロ

下
ヤ
ス

ぢやうん多羅他千歳ちるう我説者均大
 智恵ステ智我心者昂身成佛ス成下成スく
 妙レそレうレ乃般着あや日下をレまレてレをレ思レふ
 けレ及レ又レもレ事レありレ 漢誦のありレをレ守
 時レハレくレ魚レ鬼レ人レをレあレけレ悲レ辱レ慈レ悲
 のレ案レ中レてレをレ薄レをレ多レ小レ事レ現レとレ成レ仏レ侍
 既レのレ勇レとレ如レ河レをレあレりレ御レをレ守レく

△
 是は
 小佳
 女を
 さい
 びぬ

引染

○紅葉特作り物

西小西万有蔵原

△
 上
 田原

△
 時雨のしるし
 紅葉のしるし
 母のしるし
 山法師

△
 赤のん
 赤のん
 赤のん
 赤のん

△
 とら
 とら
 とら
 とら

△
 ま
 ま
 ま
 ま

△
 て
 て
 て
 て

△
 ひ
 ひ
 ひ
 ひ

命をなすまはるるのこもさるる心あつた
 にあまひおるなはへる葉葉れあも
 そひくちり下紅葉あまの露や
 らんくあつたの系を町るうらあふ
 今もたれおもふはこれあまも
 お風のあまふる志わすみんあれも
 葉をまをわさる錦中子えじと川本
 大夏

上
 此物おまをりて四角に柄をあつめて
 体

みどりや

ナニウ千白柳巻を扱大口腰帯長箱太刀
 左カヌクマクイ矢持大刀持立元スウ少刀カリ杖

面白登はるる月女田あまの
 中

色うつくしに錦をあまの
 夕時あゆませ

や席れひるるあくあゆませるへ
 けうらえ

のとあまふれりるあま
 一さう那

あまぬとそれあまの
 山ふ入席の夜ゆ送

目
河のありきと波酒をいそぐ人程
なまじやあしはれかすも袂にさくらさ
ひきかすすうなまおゆささいんより
まゆ家所を山路の道に酒何ん
かるべき 藤のやうけいせ出りあり
むらゆきをば持たぬ人の情のうらみ
乃ちもさかすものたれや **●** せん
かん

目
小酒をあらうめく紅葉をさすくとるや
実おしりや舟のついでにのよれ若
ろがうしく袖色紅葉衣をさる連る井梅
かきかたをせれ けせれんをさる連
目下
花 せうらあかくはありあり
中
さあはれおんあさるるあめゆくの
葉乃 露もあさるるあさるるあさるる

Handwritten text in Arabic script, likely a musical score or liturgical text, featuring black ink on aged paper. The text is arranged in approximately 10 lines, with red markings (possibly accents or notes) interspersed throughout. A prominent horizontal line is drawn across the top of the first line of text.

Handwritten text in Arabic script, likely a musical score or liturgical text, featuring black ink on aged paper. The text is arranged in approximately 10 lines, with red markings (possibly accents or notes) interspersed throughout.

伏

五

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

五九
才

○山邊

脇男スウ小刀扇フ道男スウ

了五廿下葛帯を威扇

上二二二二二

ふ記老そ中

彩打む

佛の書局

袖人 下

是部方小住居する者あり

相見 下 是小海ら山方部小徳也

まさぬ百磨山邊と戸控者て是

山端の山つらまはあより中を曲舞に作ら

山邊 山 山つらまはあより中を曲舞に作ら

山

百三十一卷

後年ハ口叙乃十三年にあらうと云

以程小昔老と入心あると云ふ

我ハ信濃國昔老と入心ある

郡代出くは波や志望の浦

未ハ荒乳の心我て神小

老と入心あると云ふ

遠あまさ指波ら

の松乃夕煙きぬ後乃ハ形をさ
ハ叙の所波ら書海うあ
西の未な海里と云ふと都を
さハ可も思ひなりと云ふ
是ハや我後と我中ハ城川
以ハよりたのハあ海の中
者小島ねりさうす海と云

来る者もていふ俄か口乃昔して事は七
 していれふらまうくとも水はあかからる
 物ありふと家の所有者ありすも業
 なるか細ありと出及ぶるゆうもの所
 一席うらひてさうさせ入ひあひらるも
 さあ一そおふう目をうくお着をも
 吉 事いせい入るか海もさあいませ入る
 事

まやらもよぬ事をも作物も相性
 の山居んせめていさ姑の舟の一番の口
 石をいそ 物何まうけいませませ
 らんあまいあままはる百磨山候あまハ
 まあしつんあ先け舟の次舟に座んあ
 長中い山候あは海りまあも作ませら
 あり面あはははらら。お舞にふるそひ
 事

七下
 ままへん〜
 横おふおさうく
 きふふお福とやも
 と
 五九
 松風とものに
 七下
 北
 七下
 那
 七下
 深き那
 七下
 深き那

面山蛇きウケヌイク冬威
ウホリ半切腰扇杖
あつ物

七下
 小舟を打
 七下
 ちん
 七下
 幾生
 七下
 何
 七下
 男
 七下
 七下
 七下
 水

わらわらと物まよひた者のまよひはもたぬ
山陰のまよひ種なきたかかまよひ種なき
おまえつゆまよひ種なきゆまよひ種なき
もろややおまよひ種なきのまよひ種なき
あろしめまよひ種なき我まよひ種なき
伊はまよひ種なきかまよひ種なき
まよひ種なき出まよひ種なきまよひ種なき

おは荆棘の帯を敷き 眼若光を墨
のまよひ種なき面乃父ハ 沙舟陰乃
形は尾の帯のかしら 今宵はくめ
名帯もまよひ種なき何にまよひ種なき
つはれぬの帯おく 形ありはくまよひ種なき
うまよひ種なき夜まよひ種なき何を問
人まよひ種なき我身の上まよひ種なき

かたがた
すじ山河のきく交山たりて海きく谷
海してあきく
あまの海水あうりく
うそ月志の光を揚後る人松松
あつて風雲集の友を彼家きをま
きりきとぬ山中にそまあくと嘆子
あのがさすうたあうりくを杖本丁こうて

かたがた

山更に出ありは借筆そひえて八上末美
抱をわうりつ
あまの海水あうりく
あつて風雲集の友を彼家きをま
きりきとぬ山中にそまあくと嘆子
あのがさすうたあうりくを杖本丁こうて

て月影小舟をこぎしと那西の西とある時を
はる空を向くに似はあきて世はあやしが
悩むまはる籠あつる御あまの生かす
生かすまはる籠あつる御あまの生かす
此のまはる籠あつる御あまの生かす
の推後小舟をこぎしと那西の西とある時を
か一月もあつる御あまの生かす

里とあるまはる籠あつる御あまの生かす
つゆさる小舟をこぎしと那西の西とある時を
小舟をこぎしと那西の西とある時を
あまの生かす
蝉の夜衣
の月小舟をこぎしと那西の西とある時を
か一月もあつる御あまの生かす

山姥の業ありて都おゆりて世は
世に承りて入るるは行とありて唯うら
てよ何事とありて是安の山姥あり
よありてありて是引志ありて山あり
樹の陰に河のありて是皆そ地生
て海して屋敷ありて是月の浮世
不帝と程を傳説のたきく江に
傳佛

の周をわたりありて山姥や
あ山の 山上 善き指りさくか
世をわたりて山あり 秋を
かきまわると 月を
すきまをえ抜く時ありて
さそひてありて ありて
白波離るぬありての雲の

Handwritten text in cursive script (草書) with red annotations (red dots and lines) marking specific characters or strokes. The text is arranged in several horizontal lines.

明和六年冬、松井宗信

Handwritten text in cursive script (草書) with red annotations. The text is arranged in several horizontal lines. The characters are more legible than those on the top page.

中を少少有るを在律國うて佛は今の
 さかんなるあらしの極なりは程より
 波つらに依はるといふはと果はあ
 みかゆの豊直系の開はくくあは
 うあつうにいさうなるをあらはぬわこの
 あまら木津津祿の河さけをもを
 毛志あくまらふ日れは乃西園を乞

正のすふいの不の...

急作福小見...

正のすふいの不の...

の所定なまにぬねりやと...

こそ山の家これ本直...

業内と六いつある若そ...

天物れははるる害坊少...

かるより後より入交り廻りて是まで
 くはし本書 叔之承及く是を害房ゆ
 けり人業の害室へはし本書
 うかき本書 海めくはし本書 叔唯とあふの
 乃は本書 出ひそ ひとある半余の後ふ
 わく本書 我國おほめくはし本書 うきん
 きやう本書 うきん本書 やま本書 家本書 あり本書

まさし じゆんしん乃がまをい皆我乃
 誘ひせよとのふ事あり 叔や日本を
 かまをました 邦國うして 佛法今たさか
 んが家あり 承及くはし本書 佛本書
 目ら本書 海めくはし本書 叔本書 唯本書 とあふ本書 の本書
 集りうるまありてはし本書 を本書 害本書 房本書 ゆ本書
 てはし本書 の本書 本本書 意本書 を本書 達本書 し本書 叔本書 入本書 已本書 叔本書 入本書

をさうして心こころをたすけおとすは
おのれをたすけおとすは
おのれをたすけおとすは

いままさうん
おのれをたすけおとすは

のまをたすけおとすは

中末
おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

おのれをたすけおとすは

利益余多にあらんこと
ふり流ひくつ切のまらん
目おのるん奴のさうを
肉心慈世乃かりく
をあらりて世中
五難支那形那
白のたを去るん
曲下
曲下
曲下
曲下

歎まひきり
あひさふ
さうに
畜の身
目あ
永く
をえりて

二二
上の
の

言物をうも我す因そまを此かひく
色あかしくあふさるまはらら心のたなき
むかしくさうくちびえを
つぼまをゆきやれあまうにたて
何あまのまじあわし
ましく雲と波あな海は河様あま
人さうし天おれ海くか光ち地おる

くいら六肝中おさう海うま
此を青おの物入ゆんく
柀是ハ大唐乃天物此を録吾書坊と
我事あり
あふの親念をうなせ得まゆやくさ
字そくう一佛ぬきありとせをり
りやうらふらお生海とまう

大徳と赤ふ糸
法被半切腰布羽圍

さよりのたをゆに魔乃のちまこ
 とぬめしむ^上あやまのうらより
 色く^二邪法を唱ある^一ふまきり
 より魔佛^一あめしてかんせうあつり
 志しやうあうく^二らん秘も^一こたひ
 乞を^一あうとる^二付らり^一働^二聴我仇者^一
 体大智^一劇^二らん^一ふん^二南^一人^二其上^一

西^二家の^一ま^二い^一く^二あ^一は
 東^二出^一入^二ま^一らん^二あ^一ら^二ん^一の
 く^二あ^一ら^二い^一の^二か^一あ^二ま^一せ^二て^一み^二ら^一を^二揚^一
 て^二お^一り^二ま^一ま^二ま^一り^二ま^一ま^二り^一の^二ま^一ま^二り^一の^二ま^一ま^二り^一
 く^二あ^一ら^二い^一の^二ま^一ま^二り^一の^二ま^一ま^二り^一
 王^二位^一現^二南^一の^二ま^一ま^二り^一の^二ま^一ま^二り^一
 聖^二の^一ま^二ま^一り^二の^一ま^二ま^一り^二の^一ま^二ま^一り

乃此はまきし地ふららわさつ
 女をまのほ乃まふとそ
 笑ひあつるまふめくも
 佛力非り今より後まふ家
 りふ急そるまふ座をふ
 大なる座をうのうて
 入ふまふ

融

脇僧入

角帽子水衣
腰帯珠紋扇指

中書

乞ふ諸お一見の僧妙くは我未却を免

はひ程ふ唯今初へより山 思ひ念ん

そ志るへまをまふけ毎毎をわたり山を

らえお里之月一良ふお里をかか

良ふお里をまふねおまとの女我かま

胡每志宿の名跡をまふて却お里

三ふりく
白
志山程水花はまや

小志山程水花はまや院とる

中^化の^計留^心を^心と^心る^心は^心も^心や^心と^心ひ^心の^心尉^心三^心光^心水^心衣^心
^心月^心を^心も^心や^心出^心海^心小^心あり^心て^心煙^心電^心の^心浦^心云^心
^心海^心と^心海^心又^心と^心系^心れ^心を^心隆^心奥^心と^心いつ^心く^心は^心あ^心ま^心や^心
^心煙^心電^心の^心う^心ら^心思^心く^心れ^心海^心を^心身^心た^心ま^心る^心
^心毛^心い^心ま^心や^心定^心め^心あ^心ま^心る^心も^心す^心ま^心海^心多^心あ^心れ^心西^心の^心

照^心月^心波^心を^心か^心き^心ま^心さ^心は^心と^心骨^心を^心杖^心の^心室^心中^心
^心か^心海^心空^心を^心う^心ら^心れ^心共^心煙^心電^心乃^心月^心と^心却^心の^心
^心室^心中^心の^心那^心老^心妹^心ハ^心本^心身^心を^心ま^心さ^心て^心不^心を^心
^心か^心さ^心あ^心り^心そ^心あ^心ま^心く^心か^心若^心君^心との^心後^心に^心
^心そ^心ま^心ね^心海^心年^心月^心乃^心く^心ま^心を^心遠^心へ^心杖^心を^心
^心そ^心ま^心ね^心海^心乃^心風^心ま^心さ^心る^心色^心わ^心ら^心身^心た^心ま^心る^心
^心そ^心ま^心ね^心海^心乃^心風^心ま^心さ^心る^心色^心わ^心ら^心身^心た^心ま^心る^心
^心そ^心ま^心ね^心海^心乃^心風^心ま^心さ^心る^心色^心わ^心ら^心身^心た^心ま^心る^心

秋のあまきしう羅の清いよ。結のあまき
 常のい母をよせらまは酒肴の物草は
 ちかくあまきしう羅の清いよ。結のあまき
 実の月をよせらまは酒肴の物草は
 此森乃梢ふあまきしう羅の清いよ。結のあまき
 清の月をよせらまは酒肴の物草は
 ひ出らまは酒肴の物草は

夢さ故人の心通てお傍れ身小き

中の樹の傍らくく下下門門
 たたとともも故故人の人心心今今目目ああのの秋秋言言ううああまま
 実実のの月月ああははちちのの煙煙後後乃乃くく浦浦
 本本のの秋秋ををああままききししうう羅羅のの清清いいよよ結結ののああままきき
 常常ののいい母母ををよよせせららままはは酒酒肴肴のの物物草草はは

浦を陸奥のちの浦を詠めんやちの浦
半を詠めん ちの浦 陸奥のちの浦の塩を
此の肉ふ椒とまじうる謂をい物は久 た 若
嗟哉 の 天宮の口今ふ駐乃 ちの浦 ちの浦
奥にちの浦の塩を ちの浦 ちの浦
此のあつた浦のちの浦より ちの浦 ちの浦
を海せ ちの浦 ちの浦

志はふ ちの浦 ちの浦
浦を ちの浦 ちの浦
むだ ちの浦 ちの浦
教 ちの浦 ちの浦
の ちの浦 ちの浦
志 ちの浦 ちの浦
く ちの浦 ちの浦

